

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

学園祭も終わり、哲学ルームにまた生徒がやってくるようになりました。今日は3年の男子が7人押しかけてきました。例によって記憶に頼って書いていますので、正確ではありません。

A：今日は校長先生が学園祭の体育部門の開会式でおっしゃっていた「AはAでなくなることににおいてAとして完成する」がよく分からなくて質問にきました。

―なるほど。これは「空」の論理だ、ということは言ったね。誰か説明してくれる？

B：Aという意識に囚われないということ？

―どうということ？この「いす」で誰か説明してくれないか。

C：「いす」も「いす」ということを意識しないでくつろいで座っているときに「いす」になる。

―なるほど。「いす」は道具だけれども、道具は道具であることを意識しないときに本当に使われていることになる、ということだね。「ペン」も同じように、「ペン」を意識していたら書きづらい。他にはどんな例がある？

F：僕は福田ですけど、福田は福田でなくなるとき福田になる。

―説明してご覧。

F：俺は福田だ、なんて意識したり威張っているときは福田としての活躍ができない。それを忘れて溶け込んだときに福田になる。

―いいね。それじゃあ、学園祭テーマの「ともに」はどうなる？

D：「ともに」を忘れたら大変だなあ。でも意識しないのと忘れるのとは違うような気がするし。

―その言葉を意識しないということとその言葉を忘れているというのと、とりあえず同じように考えてはどう？

A：「ともに」を意識する瞬間というのは・・・

―そうそう、それってどういう瞬間？

E：そうでないとき。

―「ともに」でないときだね。「ともに」が課題になっているとき。他には？

・・・

―「ああ、ともにいるなあ」と意識したときだね。でもその時すでに自分の世界に入っている。意識すると「ともに」いない。君はさっきから「無心」について言いたがっていたね。ちょっと説明してご覧。

G：そのままです。無心は意識したら無心じゃありません。意識しなくなって始めて無心です。

―よし。それじゃあ「親切」で誰か説明してくれないか。

E：親切は自分で意識しないで、人から評価されるもの。

—なるほど。その場合も、人から評価されて「俺は親切なんだ」と意識したら、もう親切はなくなっているね。

D：結婚は当てはまらない気がします。結婚の本質は「共にいる」ことですが、結婚は形だけの儀式だから。卒業も別れが本質で、卒業式は儀式に過ぎない。だから「空」の論理には当てはまりません。

—なるほど・・・

(しばらくじっと考えていたE君、おもむろに)

E：やっぱり、空は言えると思う。Aをそれだけで言語的名辞的に意識していても何もわからない。Aの意味は体でわかるんだと思います。Aは名前にすぎません。それを忘れたときに体でわかるんです。

—これは面白くなってきた。体でわかるということになると、すべてが習慣化されていて痴呆に近い状態のような気もするけれど。

C：意識化しなければだめです。習慣にするために意識化するんです。

—でも赤ちゃんがおっぱいを吸うのは？

D：赤ちゃんは言葉を知らなくても、ちゃんとわかっているんです。

—そうすると、さっきのC君とは反対のことを言っていることになるね。C君は意識化されたものが習慣になるといっていた。こうなってくると、意識と、体でわかるとの関係が問題になってくるね。さあ、もう時間だよ。

C：いいんです。今日は試験だから。

—でも、まだ試験あるんだろ？

B：ほらほら、もう行かないと。

活気あふれる、哲学ルームの時間でした。



ところで、本日より職員朝礼の時間で、教員向けのメッセージを述べることにしました。

校長に就任してもう2年と5か月たちます。附属の校長は大学の教員がやっていて、附属に来るのは月と木の2日だけです。その職朝で私はずっと「おはようございます。本日もよろしく願います。」しか言ってきました。先生方の朝は忙しいし、教育のプロの先生方に何か物申すことに遠慮があったのですが、先日「それではいけない、教員にもなにかメッセージをください」と、ある教員から言われ、大変遅くなってしまいましたが、本日より教員向けのメッセージを述べることにしました。

今日は「教わる気になるな、問いも自分で見つけろ」、そういう授業を工夫してほしい」、と申しあげました。勉強というのは先生が質問をし、生徒が答える。正解は先生が知っている、そのように思い込んでいる生徒が少なくありません。ここからまず崩したい。勉強は学問であり、根本的に答えはありません。問いも自分が見出さなければなりません。ここに学問の教育的な意味があります。上から与えられた問題を上から与えられた方法で答えを導き、結果を上評価してもらう、そんな人間を教育が育てたいわけではありません。教育は基本的に自立の支援です。それは人間として自立すること、人間が人間になることを支援するということです。そのためにはまず問いに目覚めさせなければなりません。どうしても問わずにはいられない問いに目覚めさせること、教員がなすべき第一歩はこれに尽きると思います。

